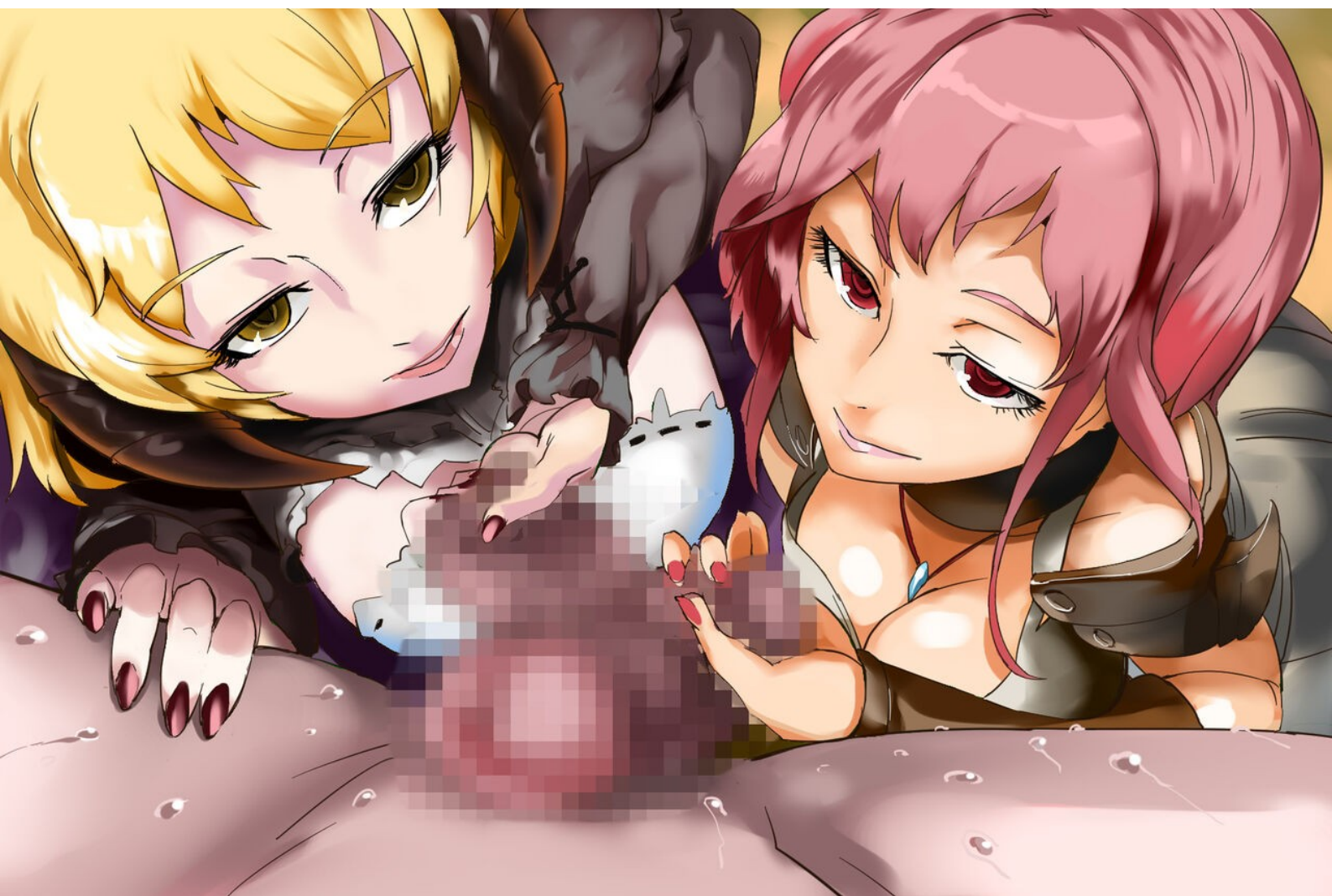




魔王の奴隷は、女に墮つ。









一 対決

以前より怪しげだった人間界と魔界の境界がとうとう開いてしまった。

英名の誉れ高い国王はただちに人間界最強の勇者ユリとその婚約者でもある賢者ナナに勅命を下した。

「侵入した魔族を掃討せよ」と。

すぐさまユリはナナとともに、開いてしまった魔界の門へと走った。

「なんだよ、こいつら……」

勇者ユリは思わずそうつぶやいた。

魔界の門は怪しげな紫色の霧の中にあつた。

湧き出してくる異形のものたち。

これまで見たことがない、それでいて確実に生理的嫌悪感を催させるその外貌。

しかし、どこことなく線は細く、力強さは感じられない。

「三下だな。やれそうだ」

勇者ユリは賢者ナナの方を向いて、そう微笑んだ。

その刹那。

邪悪な異形の魔物の、さして頑丈とも思われない顎の部分から、何かが伸びた。

虚空に銀色の弧を描くそれは、猫の髭のようにも見えた。

空中を頼りなげに、風に煽られるようにしながら飛んできたそれが、勇者ユリの肩に触れる。

「ぐわっ」

力なく肩に触れた細い触手は、そのまま肩から滑り落ちるはずだった。

だが、触手が触れたその直後に、勇者ユリは肩を押さえてうずくまったのだ。

「なんて力だ……」

巨大なハンマーで力の限り殴られたような衝撃を、勇者ユリは感じた。

「危ない！」

賢者ナナは倒れたユリに第二撃を加えようとする触手に炎の魔弾を放ち、同時に勇者の肩に治癒の呪文を放った。

賢者と呼ばれる彼女にしかない業である。

彼女はまだ年若いながらも攻撃魔法・治癒の魔法の両方を極め、同じ時代には世界にただ一人と定められた「賢者」の称号を帯びたものである。

魔法だけでなく武術にも優れ、素手での立ち会いでなら勇者ユリにも遅れを取らない。

しかし武器を取って戦った時の勇者の強さを、彼女は認めていた。

もちろん、彼女の強さも、勇者は認めている。

互いの敬意が男女の愛情へと変わり、賢者は勇者にその純潔を捧げた。

以後、二人はかけがえのないパートナーとして、幾多の戦場を駆け抜けてきたのだ。

賢者の治癒の魔法によって力を回復した勇者が、聖剣を構え直す。

「やや油断があったようだ。俺もまだまだ修行が足りない」

聖剣の切っ先を頭上まっすぐに掲げ、静かに目を閉じる。

それは同時に、賢者ナナに、ありったけの魔力をこの剣先にぶつけよ、という合図でもあった。

「獅子は兎を倒すのにも全力を奮う！」

勇者の目が見開かれ、聖剣の刀身を賢者ナナの放った魔法の炎が包む。

勇者は魔法の炎を、己の肉体から放射されたオーラと混ぜる。

そのままばゆい光体となった勇者は、魔獣に体当たりするとともに、気合い一閃、力の限り聖剣を振り下ろした。

断末魔の悲鳴とともに、真っ二つになった魔獣が倒れる。

勇者ナナは倒れた魔獣のさらに先を見据え、頬にかすかにかった魔獣の体液を、手の甲で拭った。

「そうだ…俺は…俺たちは何者にも負けはしない！」
と、その時。

勇者は視線の先に、紫の霧に覆われた何者かがいるのに気がついた。

先程の魔物のような、禍々しい気に包まれてはいない。

ゆっくりと霧が晴れていく。

そこにいたのは、一人の少女のように見えた。

さほど大きな体格ではない。

ごく普通の、女性としては中肉中背といったところだ。

地味なローブに身を包み、威圧感を感じられない。

さらに霧は晴れていき、少女の表情も見えるようになってきた。

金色の髪。

大きな目、細くはつきりとした眉。

きりつと結ばれた小さい口。

全体としてはこの上ない美女に見えるが、それでいて嫌味は感じさせない。あたたかみというか、人格の美しさが、どことはなしににじみ出ているような、そんな顔なのだ。

勇者はぼかんと口を開け、美女を見つめていた。

魔獣の背後にいた、ということは、彼女はどうかやら魔獣の主というべき立場にあるのだろうか。

だが、まったく悪人には見えない。

少女が微かに笑った。勇者も、思わず口元を緩めてしまった。

「そなたが、人間界最強の男か」

「俺のことを知っているのか」

間接的に、勇者は少女の問いに「そうだ」と答えていた。

少女はさらにはつきりと笑ったが、その表情には濃い失望の色が浮かんでいた。

「そうか…あれで最強なのか…」

「あれで、だと？」

勇者は聖剣の柄をぐっと握りしめた。人のよさそうな美女だと思っただが、なんてことを言いやがる。

「たった今魔獣を倒したところを見ただろう。人間の世界にはあれほど強い魔物はいなかった」

「そうか…それほどムキになって言うのなら、そなたの言う通りなのだろうな」

少女は言葉が続ける。

「だがな…あれより弱い魔獣は、魔界には滅多におらぬのだ」

勇者の顔色が変わった。が、少女はそれを見ようともせず、はっとした表情になって「ああ」と呟いた。

「失礼をした。まだ名乗ってなかったな」

「名乗らなかった無礼も、魔獣の瘴気にあたって錯乱した小娘の戯言とともに許そう」

勇者は剣を鞘に収めながら言った。そう。人間界最強の存在は、誰に対しても寛容でなければならぬのだ。

「妾の名はグリヌボス・アラキレト。そなたたちの世界では、いわゆる魔王と呼ばれている存在じゃ」

「魔王？」

「そう」

グリヌボスと名乗った少女は、静かに微笑む。

その横顔には、侵しようのない威厳がたたえられていた。

勇者は直感的に「こいつは嘘を言っていない」と確信した。

「今一度、問おう」

勇者は聖剣の柄を握り直して、言った。

「魔王だと名乗ったが、それは真実か」

「そうじゃ」

魔王は薄く微笑んだ。

「ならば！」

勇者は聖剣を引き抜き、頭上に掲げる。そして「ナナ！」と叫んだ。

背後に控えていた賢者ナナが、ユリの叫びに呼応する。

ナナは両腕を大きく広げ、大気の精霊に呼びかけ、あらん限りの魔力を集め、勇者ユリの聖剣へと放った。

勇者の肉体が、再びまばゆい光体となる。

人間界の魔物ならば、よほど凶悪なものでない限り、勇者の放つ気によって、その肉体を消し飛ばされてしまっていただろう。

だが「魔王」は動じない。

彼女はただ、寂しそうな一瞥を、勇者に向けたただけだった。ただ、それだけであった。

しかしそれが勇者のまどった魔力をすべて消し去っていた。

背後にいた賢者ナナは、悲鳴もあげずにその場に昏倒した。

勇者ユリも、がつくりとその場に膝をつく。

彼は聖剣を地面へと突き立て、それを杖として何とか魔王の視線の力に抗おうとした。

しかし、頼りにしていた聖剣は、一瞬でぼろぼろとなり朽ちてしまった。

支えを失った勇者の upper body は、前のめりに倒れる。

勇者ユリの意識が、ふうっと消えていく。

ユリは自分が、底のない暗闇の中に落ちていくのを感じた。

「失望した」という魔王の声を聞きながら……。

二 喪失

勇者ユリが意識を取り戻した時、彼は自分が見知らぬ城の広間にいることに気づいた。

「目覚めたか。お前のかほそい意識を吹き飛ばしてしまわぬよう、力の加減に苦労したぞ」
聞き覚えのある声に、はっとなって勇者は、その声の方向に顔を向けた。
木製の大きな椅子がある。

質素だが威厳のあるそれは、「玉座」という名がふさわしいものだった。

その玉座に、一人の女が座っている。

魔王グリヌボス・アラキレト。

出会った時の質素なローブを脱ぎ、胸と腰をわずかな黒い布で覆っただけの姿だ。

手には長く黒いレースの手袋。

脚にも同じく長く黒い靴下。

脚を組み、肘を玉座にかけ、顎を手の上において、勇者を見下ろしている。

その侮蔑を含んだ眼差しに誇りを傷つけられた勇者は、立ち上がろうとした。

「この生意気な小娘の頬を張ってやる！」

そう思った次の瞬間、勇者は自分の下半身に重い鎖が巻きつけられているのに気がついた。
よく見ると腰枷、足枷である。

手も背中に回され、手枷を嵌められていた。勇者は尻もちをついて広間の床に仰向けになった。

魔王の背後で、何者かが立ち上がった。

ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「……」

倒れた自分の数歩先まで近づいた時、勇者はそれが自分のパートナー・賢者ナナであったことに気づいた。

魔王同様、肌の露出の多い格好をしている。

ただ胸と腰を覆う布、手袋、靴下のいずれもが白であり、魔王のいでたちと好対照をなしていた。

「自分がどういう格好をしているかわかる？ みつともないことこの上ないわ」

ナナがそう言った時、ユリはそれが自分にかけられた言葉だとはわからなかった。
きょとんとした後、はっとなってナナを見た。

ナナはユリに、氷よりも冷たい視線を投げかけてくる。

ユリの背筋に、ぞくりと冷たいものが走った。

それまでの人生で、味わったことのない、不思議な感覚。

「い、これは……なんだ……？」

だがその感覚について深く考える前に、魔王の言葉が投げかけられる。

「くぐくぐ弱い洗脳をそなたら二人に施したのだが……そうかそなたは独力で解いたか」

魔王も静かに勇者の足元へと近づいてくる。

その股間の中央の、うっすらとした窪みに、勇者の目はいっしか引き寄せられていた。

「ほう」

ユリの視線に気づいたのか、魔王はユリを見下ろして言った。

「妾に対して淫欲を抱くか」

「だ、誰がお前なぞに…お、俺は男だ…男としての誇りがある…」

しかし勇者の声はぶるぶると震えていた。

視線は魔王の股間と、胸との間を行ったり来たりする。

「どこを見ておるのじやろうのう、こやつは…」

魔王は賢者ナナの方を見た。

「不遜にも魔王さまのお体を見つめているようでございます」

ナナはうやうやしく答えた。

「こやつ、おぬしの恋人ではなかったのか？ 見るのならば、妾の身体ではなくそなたの身体を見るのが筋であろう」

「わたくしなどより魔王さまの方がずっとお美しいので、やむを得ないことかと存じます」

「ふむ…しかし汚れた男の視線を浴び続けるのも、あまり心地のよいことではないのう」

「左様でございますわね…では、この男に罰を与えるというのはいかがでしょうか」

「罰とな？」

「自分が男として、どれだけ罪深いものであるかを感じ知らせ、身体に刻み込むのでございます」

「ふむ…それは一興よのう」

魔王の均整の取れた脚が軽く宙に浮き、勇者ユリの股間のイチモツの上にそっと重ねられる。

重ねた瞬間、グリヌボスの足にぐっと力が加えられる。

鈍い痛みが、勇者ユリの下半身を貫く。

「ぐわあああつ」

ユリは目を剥いて叫んだ。

「あらあら大げさな。そこは一番痛みを感じる場所ではないでしょうに」

賢者ナナであった女が言う。

「ふむ…さすがは賢者と呼ばれた女。男が一番痛みを感じる場所を知っていると見える」

「グリさまは…存知ありませんの？」

グリさま、と呼ばれた魔王はくすりといたずらっぽく笑った。

「知らぬ」

「では教えて差し上げましょう」

賢者ナナが足を上げる。女の足にはかかとの尖った赤い靴が穿かされていた。そのかかとで、ナナは器用にユリの下腹部を覆っていた布を取り去る。

だらんとした陰茎と、睪丸が露出された。

陰茎は半ば勃起し、虫のようにびくびくと蠕動している。

陰囊はかすかに収縮し、また戻るといいうのを繰り返していた。まるで何かを期待しているかのように。

「妾が踏んだのは、これだったわけじゃが」

グリヌボスがつま先で陰茎を軽く蹴飛ばす。

「それは男の快楽の源でございます。ほら、蹴られて悦んでおりますわ。あさましい」

下腹にべたりと張り付いていた勇者の陰茎が、ほんの少し宙に浮いた。

「これは悦んでいる状態というわけか」

グリヌボスは面白そうに陰茎を蹴り続ける。

「グリヌボス様それでは罰にはなりませんわ」

「ふむ…面白いのでつい続けてしまったが…そうじゃの、罰を与えるんじやったの」

「御意にございます」

「では改めて聞くが、罰を与えるにはどのようにせいと？」

「そうですね」

ナナが足を高く上げた。

そのまま、力を込めてユリの睪丸の上に、「ダン！」という音を立てながら下ろす。

ユリの充血した目と、舌が飛び出しそうになる。

だがナナはその表情に目もくれず、ぐりぐりとユリの睪丸を踏みにじった。

ユリは苦悶の表情を浮かべ、さらに目を充血させ舌を突き出したが、その喉から声は出なかった。

「ほほう」

魔王は興味深げに、ナナの足で踏みにじられる睪丸を見ている。

「なるほどこは、男にとっては苦痛の源であるようじゃな」

魔王はしゃがみ込み、ユリの睪丸を手にとってしげしげと見つめた。

「グリヌボス、慈悲深いにも程がありますわ。そうやって優しく撫でるとこの男はまた増長してしまいます」

「増長…とな」

「左様でございます。こやつはこのような惨めなものをぶら下げた汚らしい男でありながら、こともあろうに魔王グリヌボス様と同等以上の力を持つなどと自惚れたのでございますよ」

「実際には、子供と大人以上の差があったわけじゃがな」

「いいえさらにもっともっと大きな差がございました。最強の存在に対して己を同等と考える罪…これはしっかりと罰しなければなりません」

「最強…いや妾はそれほど自惚れてはおらぬ。確かに今魔界における者たちの中では最も大きな力を持つてはいるが、妾を超える存在がいたことは知っているし、それらに対する敬

意も失ってはおらぬ」

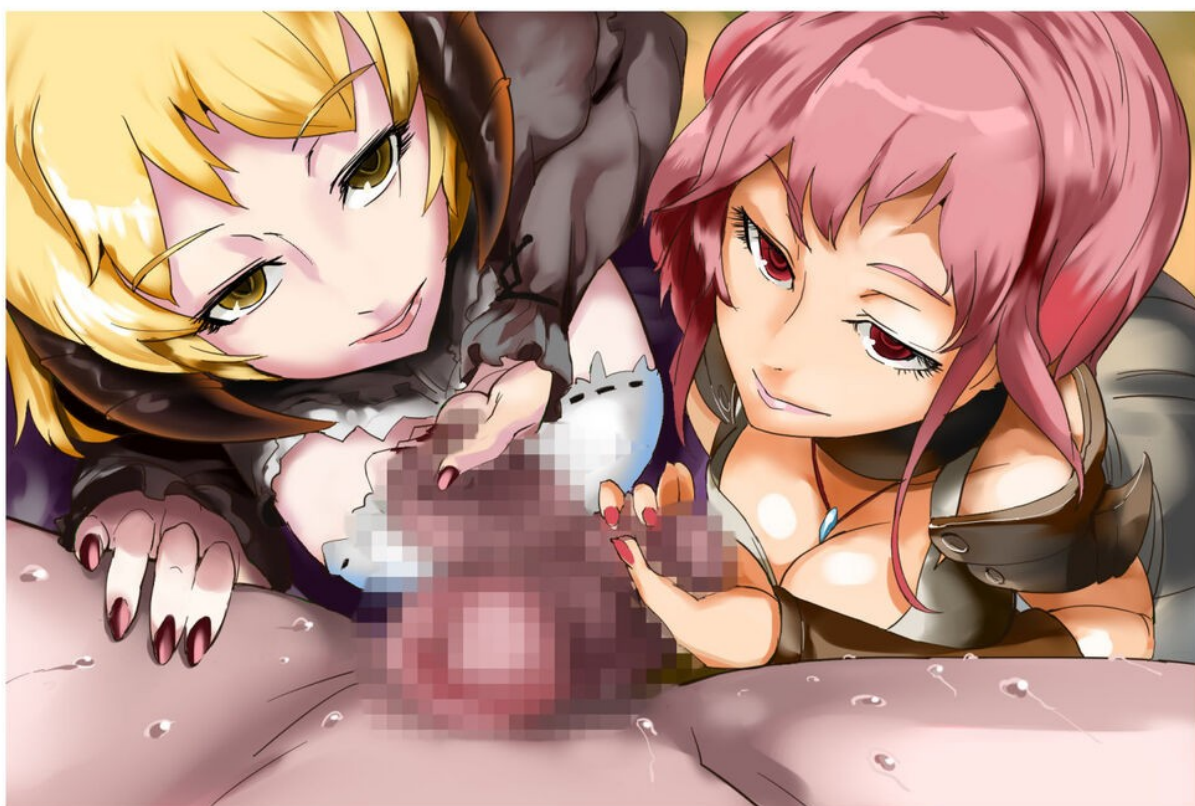
「なんと謙虚でお優しいグリさま」

「自分よりも強いものに対する敬意を失わないこと…それが自らを高める源泉となる。そう考えれば、自分より強いものなどいないと自惚れたこやつには、罰を与える必要があるそうじゃな」

「御意」

「なるほど…では気は進まぬが、罰を与えようか」

魔王はそう言うと、細くしなやかな指で、ユリの翠丸をつまんだ。



軽く握られているだけのはずなのに、万力で締め付けられているような圧迫感と苦痛を、ユリは味わった。

脂汗が流れる。

両脚が収縮し、電極を押し付けられたカエルのようにびくびくと震える。

「ふむ…」

魔王がさらに、指に力を込める。

ぶちっと小さな音が生じて、勇者ユリの睾丸は、血の霧になった。

ユリはカメレオンのように舌を突き出し、血の混じった泡を嘔く。

だがその陰茎は、白濁した液体を噴出させていた。

「はて」

魔王は首をかしげた。

「苦痛を与えたはずなのに、こやつはどうも悦んでおるようじゃ」

「それもまた男という浅ましい存在であるがゆえの業でありましよう」

「ふむ…業、かの」

「わたくしがもう片方の業の根源を消してやりましよう」

賢者であった女は、血にまみれた勇者の下腹部に手を伸ばした。

そのまま、残ったもう片方の睾丸を指でつまむ。

無造作に力が込められ、こちらの睾丸も血の霧になった。

同時に、勇者ユリの陰茎から、恐らく「男」として最後の精液が射出され、ユリの腹から

胸にかけて撒き散らされた。

その量は、明らかにユリのこれまでの射精経験の中でも最大だった。

睾丸を両方ともに潰された痛みに、ユリは気を失いかける。が、ナナはユリのこめかみの

あたりを、靴の尖ったかかとで蹴りつけた。

「楽にはさせないわ」

残酷な笑みを浮かべ、ユリを睨みつける。

「これ、もうよからう」

魔王が言う。

「汚らしい男の欲望の根源は消えた。罰は与えられたのじゃ。妾は今度は、こやつに祝福を与えようと思う」

魔王は、軽く手のひらを躍らせるように、二度三度と振った。

「女体変換の魔法をかけた」

グリが無邪気な笑顔を向けてくる。

「胸が膨らみ、骨盤が変形して行くのがわかるじやろう」

確かに骨の形が変わっていく。それと同時に全身の骨の間にノミを打ち込まれたような痛みが走る。

「続いて腹の中に、子宮と卵巣が作られる」

身体の奥底に、ぽっと熱い塊ができたような感じがする。それはみるみる大きくなり、ユリは内蔵に焼けるような痛みを味わった。

「ほうらもうおぬしは、外見的には女じゃ」

肩や脚から筋肉が消えていくのがわかる。その代わりに、胸や腰が柔らかい脂肪で包まれていく。乳首が大きくなるとともにぴんと勃起し、張り詰めていくのがわかる。

「神経がだんだん女のものになっていく。心地良いじゃろう？」

わたし、生まれ変わっていく…ユリはそう思った。もう、自分のことを「俺」と呼ぼうとは思わない。「わたし」は「わたし」なのだ…。

「仕上げじゃ。膣が形成され、女性器が開く」

腹の中に宿った熱い塊…子宮から、さらに熱い棒のようなものが体外に出ていくような感じがする…その熱い棒が肛門のやや前のあたりを突き破る。なまくらな刀で斬られたような痛みが走る。

斬られた先端の部分に、また熱い塊のようなものが作られる…それはやがて冷えて固まっていき、異様なまでに鋭敏な器官へと変わった。

「ほうら、できた…何ができたか、自分の口で言ってみるがよい」

グリにこう言われた瞬間、「恥ずかしさ」が頭から「その部分」に向かって突き抜けていった。しかし同時に、乳首と股間の鋭敏な部分が快感に包まれる。できたばかりの膣が猛烈な勢いで悦びの液体を噴出させた。

「もう一度聞こう。おぬしの身体にできたのは、なんじゃ」

魔王グリは、ユリの身体にできたばかりの鋭敏な器官…クリトリスを指先で撫でながらそう言った。ペニスで感じていたのとは段違いの快感に身を振りつつ、ユリは言った。

「お、おマ○コですっ…わたしの身体に、おマ○コができたんですっ…！ああっ、だ、ダメっ」

そう言うと同時に、ユリは絶頂に達し、そのまま気絶した。

三 屈服

完全な女体となった勇者ユリの身体から、枷が外された。
そのままユリは、地下牢へと投げ込まれた。

一糸もまとわぬ姿で。

気を失っていたユリが目を開きましたのは、それから何時間も経った後だった。

目覚めたユリは、無意識のうちに、自分の股間へと指を這わせた。

これまで体験したことのない快感が、指から性器へ、性器から子宮へと駆け抜けていく。
それに合わせて、乳首が勃起する。

乳首に指を這わせる。また新たな快感がユリを襲う。

ユリは夢中になって、性器をこね回し、乳首を刺激する。

ばつくりと開かれた性器からは、白濁した液体がとめどなく溢れていく。

地下牢の床をどろどろに汚しながら、ユリは自慰を続けた。

「こ、これが女の身体…ああつ、あんつ」

オーガズムをこんなに連続し、しかも長時間感じられるものだったとは。

「す、ステキっ、お、女の体…女の胸…女のおマ○コッ！ み、みんな気持ちいい、気持ちいいっ！」

ユリは体力が尽きるまで自慰をし続け、やがて気を失った。

その頃、玉座の間では。

元賢者のナナが、すっかり魔王の第一の従者気取りで、グリに報告をしていた。

「人間界の王が、無条件降伏を申し入れてきたとのことです」

「あつけなかったな」

「元々、民を守って戦おうなどといった気概を持った支配者は皆無でしたから…勇者ユリが赤子のようにグリさまに倒されたという話が広がっただけで、国王たちはみな逃げ出したということです」

「それで？ 誰が降伏の使者を差し出したのだ？」

「最後に残った王や領主たちが、名ばかりの世界会議とやらを開催し、そこで降伏の使者の派遣を決めたとのこと」

「そのありさまでは、使者を送り出した後に会議に参加していた王や領主も残らず逃げ去ってしまったであろうな…返礼の使者が送れず、少し困る」

「御意」

「民の側はどうなのだ。自分の家族と故郷を守るために立ち上がるものはいなかったのか？」

「そういう誇りを保てないほどに領主に痛めつけられておりましたから…彼らにできるの

は、新しい主に豚のように服従することだけでございます」

「ふむ…哀れよの。では妾が、せめて小さな誇りを持てる程度にまでいたわってつかわすことにしよう」

「そのお言葉、新しい領民どもが聞けば、歓喜の涙を流すことでありましょう。まことグリさまは慈悲深い支配者様でございます」

「いやいや。妾はそれほど善人でもないぞ。民にはよくしてやりたいとは思いますが、そうすることで鬱憤も溜まってしまう。できればそれを解消できる何かがあれば良いなあ、と思ってしまうぐらいの煩惱もまた持つておる」

「多少の憂さ晴らしをしたとて、それを責めることのできるものはこの世にはいないでしょう。わたくしも力の限りグリさまのおわずらいを消してさしあげようございます」

ナナはそう言うと、目をつぶって顔をグリに近づけた。

グリはナナの顔を抱きかかえ、その唇に自分の唇を重ねる。

ナナの唇が開かれ、グリの舌が入っていく。

そのまま二人は、お互いの唇と舌を味わいあった。

「ふむ」

しばらく後、グリはナナから身体を離し、軽くため息をついた。

「わたくしの身体では、グリさまをおなぐさめしきれないのでしょいか」

不安げな表情でナナが言う。

「いや、そなたの身体も良いのじゃが…今はもう少し、刺激の強い方法で気晴らしをした気分なのでな」

「さようでございますか…では、あれをお使いになればよろしいのでは？」

「あれとは…あれのことか？」

グリはくすりと笑った。

「御意にございます」

地下牢。

勇者ユリは、目を覚ました。

何かが頬に触れる。

それが己の身体から吐き出された淫液であつたと知り、勇者は顔をしかめる。

急激な肉体的変化と、それに伴う嵐のような欲望の渦に翻弄されていた「彼」の精神は、今ではやや落ち着きを取り戻していた。

（俺は一体どうなってしまったんだ…）

現象としては、魔王グリヌボスの言った通りである。

生まれてから二十数年、「男」として活動してきた彼の肉体が、「女」に変わった。

一時的に精神も女性化していたようだ。

(だが、今の俺は…)

ユリはすっかり筋肉が抜け落ちてしまった四肢に力を入れ、ふらふらと地下牢の中に立ち上がった。

男であった時とは、身体各部の重さのバランスが変わってしまっている。慣れるのにはそれなりの時間がいりそうだ。

脚がもつれ、前につんのめる。

虚空を泳いだ手が、腰に触れた。

触れた瞬間、電流に触れたような感覚が、「彼」を襲う。

それは快感へと繋がる性的な感覚だと、「彼」はあまり長いとは言えない女としての経験から瞬間的に悟った。

地下牢の奥から、冷たい空気が漂ってきて、身体のあちこちをかすめる。

それもすべて「彼」の肉体は快感として認識する。

「彼」は驚いていた。

女の肉体というものは、そのすべてがあらゆるものを性的な快感として受容するものなのか。

それとも、女体化した「彼」の肉体だけがそうなのか。

よく、わからない。

わかっているのは、この快感の虜となれば、「彼」は「彼」、つまりかつて勇者と呼ばれたユリとは別の存在になってしまうだろう、ということだ。

(それだけは、絶対に…)

「彼」は這いずるようにして地下牢の出口の方へと向かった。

特に鉄格子のようなものは設けられていない。

だが、微かに光が差し込むその先に、無数の殺気が潜んでいることに、彼は気づいた。

魔物どもがいる。

(そのすべてが、俺よりも強い…)

勇者ユリは、唾を飲み込んだ。

恐らくこの魔王の城は、城門までずっとこんな調子なのだろう。

物理的な障壁は、ほぼない。

だが至る所に潜んでいる魔物たちの殺気が、見えない障壁となっていた。

「勇者ユリ」であっても、この障壁を打ち破って外に出ることはかなわない。

だが、女としての快楽に流され、「勇者」とは別のものになってしまったら、なおのこと脱出は不可能となる。

(気持をしつかりと持たなくては…そう、ナナの正気も取り戻させて、二人でここを脱出するんだ…)

ユリは目を閉じ、ナナの姿を思い浮かべた。

瞳の裏側に現れたナナは、全裸だった。

ユリは二人で何度も愛を確かめあった日々を思い出していた。
すでになくなっていくはずのベニスが、疼いたような気がした。

(そうだ俺はここから逃げるんだ。逃げてまたナナと…)

女を抱くために魔王の城から逃げようと思う、というのは、勇者としてはあまりに恥ずかしいことだとわかつてはいる。

だが、「女を抱く」ということを支えにして正気を保つようにしていないと、自分の肉体の「女」に飲み込まれてしまいそうに思えた。

ユリは脳裏に、ナナのあられもない姿を、さらに描き続けた。

そのまま地下牢の闇を、泳ぐようにして前に進む。

地下牢の出口のあたりを、障壁のように包んでいた魔物たちの殺気が、薄れていく。

(俺の気に圧されたのだろうか…)

勇者ユリはそう思ったが、実際はそうではなかった。

魔物たちは単に「彼」を誘導していただけなのだ。

彼方にぼんやりとしていた光が、しっかりとしたものとなり、やがてはつきりした「出口」になって見えてくる。

勇者ユリはその光の中に飛び込んだ。

地下牢から出た先は、かつて見たことのある場所だった。

魔王グリヌボスの玉座の間だ。

二人の人影がある。これにも見覚えがある。

片方は魔王グリヌボス。「彼」をこんな身体にした張本人だ。

そして、もう片方は…勇者ユリがついさっきまで脳裏にその肢体を描き続けていた、ナナその人だった。

勇者ユリはぎくりとした。

現実のナナが、「彼」の妄想そのままの全裸だったからだ。

しかも、軽く自然に開かれたその両脚の間からは、半透明な液体がたらたらと太ももをつたっていた。

乳房は張り、その中央にある桜色の突起はびんと天を向いている。

性的に興奮していた。

ナナは潤んだ目で、魔王グリヌボスを見つめている。

魔王がナナに顔を向け、微かに微笑む。

美しい。

視線を完全に捕らわれ、魔王以外を見ることができなくなってしまった勇者ユリの視線は、そのまま魔王の肢体を舐めるように這い回る。

均整の取れた乳房。

優美な曲線に覆われた腰。

すらりと伸びた脚。

足元まで移動させた視線が、再びくるぶしから太ももまで上がっていく。と、ここでユリの視線が止まった。

ユリはグリヌボスの肉体の一点：股間に釘付けになった。心臓が早鐘のように鳴る。

(な、なぜ…なぜここに…こんなものが…)

その部分には、怒張した男根があった。

魔王の腰部は、以前と同じ小さな黒い布で覆われていたのだが、男根はそれを突き抜けるようにして、その大部分をユリに見せつけている。

(あ、あれは…)

ユリはその男根の形状に見覚えがあった。それはついこの間まで、彼の股間についていたものとそっくり同じだったのだ：大きさと太さを除いて。

かつてのユリのもより、三回りは大きなソレは、湯気を立てながらびくびくと脈打っていた。

先端からはたらたらと透明な液体が湧き出している。

「何を見つめておる。淫乱な「女」じゃのう」

魔王が笑う。

「戯れにそなたのものを魔法で生やしてみたのじゃが、なかなか面白いのう」

グリヌボスはそう言いながら、ゆつくりと腰を回すように動かしだした。

「何よりも興味深いのは、この汚らしいモノを股間につけると、とてつもなく気分が下衆なものになるということじゃ：本来美しいはずの女の肉体を、汚したい犯したいと思えなくなる」

勇者ユリは魔王の声には答えず、じっと魔王の股間のイチモツを見つめている。

(あれが欲しい…！)

あれがあれば、ナナに対する強い気持を、さらにかき立てることができる。

それは確かに魔王が言うように、下衆で野蠻な感情だろう。

だがこの魔王の城から脱出するためには、その気持を維持し続けることが重要なのだ、とこの時の勇者ユリは思い込んでいた。

(欲しい…！)

その視線に、魔王グリヌボスは気づいたようだ。いや、最初から勇者の心のうちなどお見通しで、そうなるように導いたのかも知れない。

「何を物欲しそうな目で見つめておる。これはついこの間までそなたの股間にぶら下がっていたものじゃぞ」

グリヌボスはそう言うものの、今それは決して「ぶら下がって」なぞいない。

青筋を浮き出させ、天に向かつてそそり立っている。

「たとえ以前はこんなつまらない男の股間にぶら下がっていたものでも、今はグリヌボスの

ものですわ」

うつとりとした目つきで、ナナが言う。

「グリさまの身についているだけで、この上もなく尊いものにわたしには思えます」

「うれしいことを言ってくれるのう。かわいいやつじゃ」

ナナは目を閉じ、グリヌボスは唇を吸った。

ナナは差し込まれてきたグリヌボスの舌を受け入れつつ、手を魔王の股間へと伸ばす。

「ああ…愛しゅうございます」

そう言うとナナは、「魔王の」ペニスを撫で始めた。魔王のペニスはさらに硬さを増す。

「そうやって撫でられると、おかしい気分になってくるのう」

魔王は目を細めた。

勇者ユリは食い入るようにそれを見つめている。

(あ、あれは俺のものだ…)

(あれが欲しい…)

グリヌボスは顔を動かさずに、ちらりとユリの方を見た。

「ふふふ…まるでおあずけを食った大じゃな。よだれを垂らしながらこちらを見ておる」

「垂らしているのはよだれだけではないでしょう」

ナナが魔王のペニスを撫でる手を早めながら言う。

「このたくましいグリさまのモノを見て、できたばかりのマ○コから、はしたない汁をた

ぎらせているはずですわ」

ナナの言葉に、ユリはぎくりとした。

太ももに意識を集中する。

確かにそこには、熱い体液がだらだらと流れていた。

もちろん、その体液の出処は、両脚の付け根にある秘裂だ。

「ふむ、本当にそうなのっておるか？ 見せてみるが良い」

冗談じゃない、とユリは思った。

女になってしまった自分の、そんな部分を、しかも性的に興奮しているそれを、他人に見

せられるものか。

しかも、魔王グリヌボスに。

昨日までは自分のものだったはずの陰茎を、股間にそそり立たせている存在に。

ユリの顔は羞恥で赤く染まった。恥ずかしい。なぜ恥ずかしいかはわからない。とにかく

恥ずかしいのだ。

グリヌボスだけには、自分の秘所を見られたくない。

ユリは自分の股間を、両手で隠そうとした。

だが、魔王グリヌボスが一瞥すると、その手は自由を失う。

逆に両脚に、自分のものではない力が加わるのを、ユリは感じた。

力づくでこじ開けられたように、ユリの両脚が開く。

いや実際にこじ開けられたのだ。
魔王の見えざる力によって。

真っ赤に充血し、ぱっくりと開いたユリの秘部が、グリヌボスとナナの目前に晒された。
「まあ」

ナナが笑う。

「女のわたしですら恥ずかしくなってしまうぐらい、はしたなく濡らしますわ」

「妾も女ではあるが、ああまではしたくなってしまうことはないのう」

二人はユリを蔑みの目で見下ろし、ふふふと笑った。

「見てくださいますしグリヌボス。クリトリスもあんなに勃起させてますわ」

「まるで男のもののような」

「あれでグリヌボスを犯そうなどと、不遜なことを考えているのでしょうか」

「わからぬぞ。あれでも元は自分を『勇者』であると思ひこんでいたものじゃ」

「まったくんでもない思い上がりでございましたわ。グリヌボスの前では手ひとつあげる
ことのできない、情けない豚でしかなくせに」

「そうきついことを申すでない。さすがに哀れになる」

哀れだ、というグリヌボスの一言が、ユリにとってはもつともこたえた。

恥辱に心臓が引き裂かれそうになる。

だが、言葉で辱められれば辱められるほどに、秘裂は蜜を溢れさせ、乳首と陰核は勃起する。

子宮がうずいて熱くなる。

恥ずかしくて死んでしまいそうだが、心のどこかで、別の自分がささやき始めたような気がした。

「もつとして欲しい」と。

「ふふふ。はあはあと息を荒げるだけで、何も言えなくなっておるのう」

「頭の中が口に出せないような下衆な言葉でいっぱいになっているからでしょう。まったく犬にも劣るいやしいモノですわ」

ナナの手は魔王のペニスを撫で続ける。

グリヌボスの手がナナの胸に触れ、そのまま乳房を愛撫し始める。

「…あ…ああ…」

ナナの口から、切なげな喘ぎが漏れる。

豊かなナナの乳房が、たぶたと揺れる。

「そなたのこころは、触り心地が良いのう」

グリヌボスがナナの耳に息を吹きかける。

ナナは「あつ」と小さく叫ぶ。

「ふふふ。良いことを思いついたぞ」

魔王が微笑んだ。

「あやつの胸をな」

グリヌボスはそう言うと、ユリの胸を見つめた。

それは性的に興奮し、一回り大きくなってはいたが、サイズとしてはまだ「普通の女性」のものだった。

「そなたのこの胸よりも、大きくしてみよう」

グリヌボスが言った瞬間、ユリの胸は軽い痛みに包まれた。

乳房が熱くなる。

ゆっくりと膨らんでいくのが、ユリ自身にもわかった。

乳首はさらにはちきれそうになる。

（あ、ああつ、駄目っ、溢れちゃうっ）

そう思った瞬間、乳首の先端から、ビュツと何かがほとばしり出た。

「まあ、お乳を噴きましたわ」

ナナがあざ笑う。

「乳かどうかはわからぬな…なにせ昨日まで男だったのだからな。身体はどこに残っていた精液かも知れぬぞ」

「浅ましい…そんなになつてまで射精をしたいのでしょうか」
そうは言われたものの、ユリにはわかっていた。

これは母乳だ。母乳以外のなものでもない。昨日まで、昨日まで誰よりも男らしい男だったはずのこの自分が、あるうことが母乳を噴出させてしまった…！

ああ、だが乳汁を放つことの、この心地よさはどうだ？ 女の乳首は男のペニスの何倍も敏感になっている。その中を突き抜けていく乳汁がもたらす快楽の、なんと甘いこと！

「も…もっとお…」

口の端からよだれを垂らしながら、ユリはふたりに訴えた。

「もつと、もつと罵ってください…お、お乳もつと出したい…です…」

「罵ってもらえると、乳がでるのか？」

「は、はいいつ、言葉でいじめられると、恥ずかしくて気持ちよくて、お乳出ちゃうんでしゅう…」

「理解できませんわ。わたしはお乳など出したことはありませんので」

「妾もじゃ。しかもそれが気持ち良いと…元男の考えることはわからぬのう」

「こ、こんな…」

ユリはあうあうと口から泡を噴きながら言った。

「こんなきもひいいカラダにしたのは、まおうしゃまでひゅう…」

俺は一体何を言い出してるんだ、とユリは思った。

俺は勇者だったはずだ。男だったはずだ。男に戻らなければならない。勇者に戻らなければならない。

そのためには、女の身体を見つめ、欲情し、「こいつを犯してやる」と思わなければならない

い。そうしなければ、男の象徴を取り戻すことができないからだ。

だが、今の俺はどうだ？ 女の快感に全身を苛まれ、もつと、もつとと浅ましく、俺を男でなくしたその相手に哀願しているではないか。

「ふふふ…よいぞ。それでこそ元勇者じゃ」

自分の心を覗かれたような気がして、ユリはぎくりとした。

「何を驚いておる」

グリヌボスは、ユリに向かって一歩進んだ。

「妾には、そなたの心の内などまるわかりじゃ」

グリヌボスの背後でナナがくすぐすと笑う。

「そう…このはしたなく開いて、ひくひく痙攣しているもの以上に、くつきりと見えるのじゃ」

グリヌボスはそう言いながら、ユリの膣口に足の親指を置き、くいと力を込める。

ユリはあつと言いながら、膣口から小さく潮を噴いた。

「ふふ…ふ…実に面白い。ちよつと刺激すればいろんなものを噴き出すのう…そんなに噴き出すのは気持ち良いか」

「き、きもひいれしゅう…」

ばくばくと酸欠の金魚のように口を動かしながら、ユリは内心では別のことを叫んでいた。どうした！ユリ！抗え！魔王に抗って勇者の心を取り戻すのだ！情けない声を出すのをやめろ！「貴様を犯してやる」と魔王に毅然と立ち向かうのだ！と。

「ほう、妾を犯そうというのか…その意気だけはよし、としてやろう」

「そんなことできつこありませんのに」

背後でまた、ナナが笑う。

「心の奥底まで見通してしまふグリさまに対しては、すべてを投げ捨てて絶対服従するしかないのよ。わたしはもう、グリさまに身も心も捧げ尽くしたわ。バカなユリ…。グリさまを犯すだなんて、なんてバカで不遜なことを考えるのかしら。第一、あなたの股間にはもうチ○コは無いじゃないの」

そう言いながらナナは前に進み、靴の尖ったかかとでユリの乳房を踏みつけた。どびゅつと乳汁が噴出し、ユリは達する。

「あひやああああつ」

「なんて情けない声を出すの？ 恥ずかしくはない？」

「は、恥ずかしいれしゅう…で、でも…」

「でも？」

「恥ずかしいけど、きもひいれしゅう…！」

「ふふ…ナナよ。こやつ口ではこう言っているが、心の内ではまだ必死に妾に抗おうとしておるのじゃ。かわゆいものよ…じゃがな」

言いながらグリは、下半身を覆っていた布を脱ぎ捨てた。縛めから放たれたペニス、ぶ

んと大きく前後に揺れる。

「ひいっ」

ユリが、カエルを踏み潰した時のような声を出す。

「その実力に見合わない自尊心は身を滅ぼす。妾は今そなたに、自分の身の程を知って欲しいと思うのじゃ」

グリヌボスは、先端からふつふつと我慢汁をたぎらせるペニスをユリの鼻先に突きつけた。

「怖い」。ユリはそう思った。

なぜ怖いのか。昨日まで自分についていたものではないのか。それは自分に快楽を与えてくれたものだっただけだ。女性化してから味わったものと比べれば、ささやかなものではあったが。

「怖いか。それは良いことだ。自分の無力さを思い知るには、まず恐怖を感じなければならぬ」

ユリは身体をひねって逃げようとした。だが、背後からナナがユリの身体を抱きかかえ、がつしりと固定する。

「うふふ…怖いのはほんの少しの間だけじゃ。じきにこれも気持ちよくなるわ」

ナナの手が、ユリの口をこじ開ける。

グリヌボスのペニスが近づいてくる。

海産物の臭いが、つんと鼻につく。

グリヌボスは、狙う場所を確かめるように、ユリの口元をつんつんと二度ほどつついた後、一気にペニスを挿入した。

「うぐうううううっ！」

喉の奥まで巨大なペニスを突きこまれ、ユリは悶絶する。
息ができない。胃の中にあるもの全部が逆流してくる。
だが喉の奥はグリヌボスのペニスでがっちりと蓋をされ、逆流してきた液体はすべて胃の
中に戻される。
酸で焼かれた、ひりひりとした痛みだけが喉に残った。
「ふむ…なかなか具合が良いぞ」



「では動かしてみましようか？　グリさま」

うやうやしい口調とは裏腹に、ナナは乱暴にユリの髪を掴み、こめかみの両端に指を回してぐつと力を込める。

「ほら、グリさまにご奉仕するのよ」

ナナはそう言うと、ユリの頭全体を前後に揺すぶる。

ユリの喉の一番奥の部分が、幾度もグリヌボスのペニスで突き立てられる。

「んっ、んんっ…これは…な、なかなか良いものじゃな、男のチ○コというものもっ」

魔王グリヌボスの頬が、ほんのりと染まってきた。

「ほら、ユリ、この豚野郎。ロマ○コ犯されて感じてるんでしょ？　もつと唾を出して、グリさまを気持よくして差し上げるのよ！」

気が遠くなる。だが、失神しそうなタイミングをナナが測って、その度に靴の尖ったかかとでユリの尻を蹴り上げる。鋭い痛み、ユリはこちらの世界に引き戻され、白目を剥きながらグリヌボスに奉仕を続けていた。

「んあっ、はっ、よ、良いぞっ、そろそろ…妾はイキそうじゃ…！」

ユリの頭の動きに合わせてるように、グリヌボスも激しく腰を動かす。

口の中で、ペニスさらに膨らんでいく。

「あ、あっ、ああああっ」

これまでの威厳ある魔王の声ではない、切なげな「女の声」を上げながら、グリヌボスは背中を弓のように反らせ、ペニスをユリの口の奥に突き立てたまま、ぶるぶると身体を震わせた。

一瞬の間の後、大量の精液が、ユリの口の中に吐き出された。尿道がびくびくと蠕動し、後から後から精液が口の中に送り込まれる。

「んはあ…あっ、ああ…」

口の中いっぱいに広がったペニスの隙間から、精液が飛び出してきた。圧力がかかっているため、飛び出す時は勢いがいいが、やがてその重みで弾道を下向きにそらし、ぼたりぼたりとユリの身体に落ちる。

グリヌボスの絶頂とともに達し、母乳をこれまで以上に溢れさせていたユリの乳房の上に、粉を水で溶いた塊のようなものがぼとぼと落ちる。

ユリの全身、グリヌボスの下半身は、たちまち白濁した粘液でべとべとになった。

「ふう…男の射精というのも…なかなかよいものじゃ…」

グリヌボスは快感の余韻で、その身を小刻みに震わせる。ユリも快感に全身を締められ、身動きできなかった。

しかし、そんなユリをまたナナが蹴りつける。

「何をしているの？　さっさとグリさまをキレイにしてさしあげなさい。全部舐めとるのよ」

四 饗宴

「どうもおぬしはチ○ボが大好きなようじゃな。実に丁寧に隅々まで舐めあげてくれるものじゃ」

うつとりとした目で、魔王グリヌボスが「元勇者」ユリを見つめる。

「じゃがまだ、妾に抗おうとする心も残っているようじゃ」

「身体はどうに、グリヌボスではないものになっていきますのにね」

ナナはそういうと、またユリの尻を蹴り上げた。すでにユリの白い臀部は、赤くなって血が滲んでいる。

「やはり、これでその身を賣かなければ心は折れぬようじゃな」

グリヌボスはゆつくりと立ち上がった。

そのまま背後に回り込む。

「あ…は…ああ…やめて…やめてくらひやい…」

「今更そんなことを言つて…あなたの身体がグリヌボスのチ○ボを欲しくてたまらなくなっていることぐらい、とつくにバレているのよ」

肥大してめくれあがり、赤くつやつやと輝いていたユリの陰核を、ナナが捻り上げた。

ユリは悲鳴を上げるが、同時に潮を噴き達する。

「まあはしたない…でも受け入れの準備はもうばつちりのようですよ、グリヌボス」

「うむ…」

グリヌボスは魔法の力でナナを四つん這いにさせ、その背後に脚を開いて立った。

そそり立つペニス。

だが背後から見れば、人は魔王の股間にはペニスとは別に女陰が存在していたことに気づいただろう。

そのマ○コは、とろとろと蜜を滴らせていた。

ナナはうつとりとグリヌボスのペニスを見つめている。

（ああ…こ、このまま俺は…犯されてしまうのか…!）

それは勇者としてこれ以上はないほどの恥辱だ。だが、そのことによって与えられる快楽は、どれほどのものだろう。

（ああ…恥ずかしい…生きてはいられないほど…だが、欲しい!）

この部屋に引き立てられた時から、ユリはグリヌボスのペニスを見て「あれが欲しい」と思い続けてきた。

それはグリヌボスのペニスがかつては自分のものであったためで、それを取り戻すことにより、自分が男として、勇者として復活できると思つたためだった。

今でもその思いは変わらない…変わらないはずだ。

「そうか…じゃが、本当にそうなのかな？」

ユリの白く豊かな臀部を掴み、グリヌボスが囁く。彼女は人の心が読める。

「これが欲しい…その気持は今も変わるまい。妾もそれは認めてやろう」
ペニスの先端が、膣口に当てられる。

「じゃが男として、これを取り返したいのかの？」

そう言いながら、グリヌボスはペニスの先端で、膣口の縁をなぞる。

愛液がペニスからの分泌物と交じる。

「女として、これを受け入れたいのではないのか？ 思い切り突き立てられて、身も心も妾のものになってしまいたいのではないのか？」

膣口をなぞるペニスの先端の動きが、次第に速くなる。

「どうじゃ…言うてみい。これが欲しいのか？ 欲しくないのか？」

欲しい。その気持は変わらない。だが男としてそれを取り戻したいのか、女として受け入れて、快楽の底に沈みたいのか。今ではユリ自身にもわからなくなっている。

「うあ…あ…」

何かを言いたい。グリヌボスに自分の意思を伝えたい。だがその意思そのものが混沌として、何がなんだかわからない。

「あ…ほ、ほし…ほしい…でしゅう…」

ユリの口は、ユリ本人の意思とは関係なしに、言葉を表した。グリヌボスは満足そうに笑った。

「ならばその思い、叶えてやろう。妾もそなたが欲しい！ そなたの中で思う存分弾けたいのじゃ！」

真つ赤に焼けた鉄棒が、股間に差し込まれたような感覚が、ユリの身体を貫いた。
痛い。苦しい。息が止まる。

「うむ、実にねつとりと…よい具合じゃ…っ！」

グリヌボスがペニスを突きこむ。

ユリのマ〇コはおびただしい愛液をほとばしらせ、ペニスが突きこまれるたびに、ぐちゅ、ぐちゅと淫靡な音をたてて、外へと飛び出していく。

飛沫がグリヌボスの形のよい胸にまで飛ぶ。

ユリの背中へもはねかかる。

二人は全身をユリの愛液まみれにしつつ、身体を重ね続けた。

「うあつ、あつ、しゅごいっつ、マ〇コしゅごいれしゅううっ」

グリヌボスは快楽を貪るため、ユリの奥の奥まで突き入れる。先端ががんと子宮口に当たり、子宮を介してユリの内蔵すべてが揺さぶられる。

「わ、わらしのモツが…全部子宮になっちゃいましゅううっ」

ユリの身体の中は、すでにすべてが快感のジェネレーターになっていた。振動を受ける度に、ユリは全身のそこかしこにアクメを感じた。

「あつ、あはあつ、よ、よいぞ…きゅうきゅうと妾のチ〇ボを締め付けて…チ〇ボが蕩け

そうじゃ…！」

魔王グリヌボスが、目を虚ろにし、口を半開きにして腰を振り続ける。

「んはあああつ、来るうつ、わ、わらしイッちゃいましゅつ、マ○コイツちゃいましゅつ！」

「んはつ、あつ、ああつ、わ、妾もつ、妾もじゃつ、だ、出すぞつ、そなたのマ○コの中に出すぞつ！」

「く、くだしやいいいっつ、グリしゃまのザーメン、わらしの子宮に思いつきりらしてくだしいいっつ！」

そう言いながら、元勇者ユリは絶頂に達した。全身が痙攣し、膣がグリヌボスのペニスを、これでもかとばかりに締め付ける。

「くああああつ」

グリヌボスはそう叫びながら身体を反らせる。結合部から飛び出した精液の塊が、洪水のようにその美しい顔に、胸に飛びかかる。

「うああつ、あつ、ああつ」

「あふうつ、あんんつ、あふつ…」

ユリは幾度も身体を痙攣させ、その度ごとにグリヌボスは射精した。

二人は無言で、しばらく快感の余韻を味わっていた。

「これで完全に、グリさまの下僕ね」

「はい…わらしは…グリさまの奴隷でしゅう…」

グリヌボスは、まだアクメの余韻が収まりきらない、といった表情で、広間の床に仰向けに寝ていた。

その足元にユリはうずくまり、べちよべちよとグリヌボスの足指を舐めていた。

「ふむ…妾の奴隷になりたいのか」

「はい…どんなことでもいたしましゅ…」

「では奴隷としてどれだけ使えるか、確かめるところか」

そう言うときグリヌボスは、ナナを手招きした。

ナナが近寄ると、グリヌボスはその胸を弄び始める。

「おぬしとのまぐわいは気持ちよかったが、床が汚れてかなわぬ」

「はい…汚した汁は、全部わたしが舐め取らせていただきますしゅ…」

そのままユリは、グリヌボスの足からふくらはぎ、ふくらはぎから太ももと、べつとりついた自分の愛液と、グリヌボスの精液とを舐めとっていった。

「次はそれじゃ。丁寧に掃除をするのじゃぞ」

「はい…」

ユリはグリヌボスのペニスを、いとおそうに両手でおしいたくと、舌を出してべちよべしよと舐め始めた。



みるみるうちにペニスにまとわりついていた汁が消えていく。
それとともに、魔王のペニスは再び硬さを取り戻していった。
「ナナ、今度はそなたの番じゃ」
グリヌボスはユリを再び四つん這いにさせた。そのままユリの身体を椅子のようにしてま
たがり、ナナと抱き合う。二人は口づけをし、互いの舌を絡め合う。

「お待ちしておりました…すでもう、準備は整っております」

そう言いながらナナは脚を開き、己が性器を開いた。花卉の中からはもう透明な蜜がこんこんと湧き出していた。

グリヌボスはユリの上に跨ったまま、背面座位でナナに挿入する。

「ああっ…グリさま…太くて…熱いですうっ」

ナナは歓喜の声を上げる。

（ああ…かつてわらしが犯していたナナの穴に、グリしゃまのチ○ポがずっばりとハマっている…）

二人の結合部は見えない。その有様を想像しながら、ユリは思った。

（わらしが台になり、その上でナナがマ○コでグリしゃまにご奉仕…な、なんて誇らしいお仕事れしゅか…）

ユリは心臓を高鳴らせ、乳首と陰核を勃起させる。

もちろん、「彼」の秘裂はすでに愛液でどろどろになっていた。

かつて自分が抱いてきた女体が、別のペニスで突かれる度に、自分が突かれているかのような快感が身体を走る。

「ユリ、いくら気持ちが良いからといって、自慰をしてはいかんぞ。しっかり妾たちの台となるのじゃ」

「は、はいしゅいましえん…しっかりお務めさせていたらきましゅ…」

ユリは頭を落とし、しっかりと「台」の役目を務めようとする。

グリヌボスがペニスを出し入れするたびに、ユリの頭上でナナの愛液がぐちゅぐちゅと音をたてる。白い泡が、ユリの頭に落ちる。

「ああっ、グリさま、す、すごいですっ」

ナナが快楽に身をよじる。

「グリしゃま…グリしゃま…わ、わらしも…わらしもマ○コに何か挿れて欲しいしゅ…」

「ま、まだじゃ…ナナの中に出してから、改めて挿れてやる…」

「うああっ、グリさまっ、わ、わたしもうマ○コが爆発しそうですっ、ひいつ、い、イクっ、イツちやいますっ！」

「グリしゃまっ、グリしゃまっ、い、挿れてくだしやいっ！ グリしゃまのチ○ポ、わらしのマ○コに思いつきり挿れてくだしやいっ！」

その瞬間。

魔王の「トゲ」が動いた。

魔王グリヌボスが意図して動かしただのか、反射的に勝手に動いたのかは、わからない。

だがそれはそれ自身が生命あるかのように、うねうねと宙を這い回り、勇者ユリの膣内に突入した。

「あああっ、グリしゃまあああ、い、イクうううううっ」

ユリは歓喜の叫びをあげた。

だが、そこで時が止まった。

ユリの身体は、一瞬で石へと変わってしまったのだ。

ナナの身体の中で射精した後、ゆっくりと身体を離れたグリヌボスは、さっと右手を動かした。

魔王の股間にあったペニスが、一瞬で消え失せた。

「グリさま？」

ナナが不安げに声をかける。グリヌボスは振り向いて、薄く笑った。

「こやつ、残念だが奴隷にはなりきれなかったのう」

「……」

「奴隷であれば、いついかなる時でも主人の快楽を優先すべきなのじゃ。じゃが、こやつは土壇場で己の快楽を優先しようとした」

そう言って、グリヌボスは石になったユリの背を撫でた。

「こやつ時は止まった。じゃが感覚は残っておる。アクメに達する寸前の状態でな…人によっては無間地獄かも知れんが、こやつにとってはひよつとして、褒美なのかも知れぬ」

「グリさま…」

「妾はな、こんなやつでも何かの役に立たせてやりたかったのじゃ。せめて奴隷に思ってたが、それも務まらぬとなると…せいぜいこの広間の椅子の一つとして使ってやるしかあるまい」

かくして、勇者ユリは、女体化しアクメに達する寸前の状態で石化し、魔王の間の椅子となったのであった。

魔王グリヌボスは、その後もその椅子を使い、かつて勇者の恋人であったナナを抱いたが、そのことを石となったユリがどう思っているのかは、今となっては知る術がない。

【奥付け】

文書：おおつやすたか

挿絵：sinzan

<http://www.pixiv.net/member.php?id=13413>

監修：妖精社

http://www.dlsite.com/maniax/circle/profile/=maker_id/RG30658.html

頒布元

D L s i t e : http://www.dlsite.com/maniax/circle/profile/=maker_id/RG30658.html

D M M : <http://www.dmm.co.jp/dc/doujin/-list/=article=maker?id=71946/>

d i g i k e t : http://www.digiket.com/a/a_worklist/_data/ID=CIR0007626/

【御礼】

スパニングの魅力 僕のお尻にお仕置きを様

<http://spankingfm.blog13.fc2.com/>

マニエートの喜び様

<http://kazovk.com/>

M男な二次作様

<http://monanizisaku.blog.fc2.com/>

エロ同人NAVI様

<http://dnavi.eromoe.com/>

DL同人観測所様

<http://dldojin.blog28.fc2.com/>

HENTIリンク+萌様

<http://shirayuki.saiin.net/~henti/>

syna's Forced Feminization Stories (強制女性化小説・情報)様

<http://ftf.gmania.blog95.fc2.com/>

桃色魔同人様

<http://blog.livedoor.jp/momoiroma/>